



大都会の再開発を超えて地域で 助け合う～超高密度都市の地域防災～



東京都中央区 日本橋三丁目西町会 会長 野田 哲平

1 はじめに

はじめまして。東京都中央区の日本橋三丁目西町会の会長の野田哲平です。

私達の町会は今年で90年を迎えます。かつてこのあたりは木密（木造住宅密集地域）でしたが、高度成長と共にビル化が進み特にここ10年で様相は一変、超高層ビルが林立する地域に変貌しつつあります。

また、巨大鉄道ターミナル東京駅に隣接していることから夜間の数万倍の昼間人口の地域が少なくありません。中には夜間人口ゼロ地帯も珍しくない地域になっています。この傾向は年々増加し当分続くと考えられます。その様な特殊な環境にあって、町会が残っているのもまた日本橋の文化でもあります。かつて住民によって構成されていた町会も、今では他地区に居住し貸しビルなどを主に生計としている方、また事業所として町会員になっているケースも増えています。



超高層ビルが林立する日本橋三丁目

2 阪神・淡路大震災を契機に スタート

さて、私達の町会が本格的に防災に取り組み始めたのは、1995年の阪神・淡路大震災がきっかけです。町会内の事業所の皆様にアンケートを実施し大規模地震が発生した場合、町会に何をしたいか？ その結果は「情報」でした。企業の皆様は、行政からの被災情報や救援情報、避難所や救護所などの情報、鉄道などの交通情報を伝える役目を町会に求め、また同時に事業所の被災情報や救援情報を区や都の災害対策本部や消防などへ正確に迅速に伝えて欲しい。その様な行政機関との情報の入出力機関としての機能を求めていることが分かりました。

この点を重視して事業者と協議会を立ち上げ、町会と事業所が連携し、独自の災害対策本部を設置するなどの細かな協定を「助け合い宣言」として纏め区の防災計画を補強強化する位置づけでスタートいたしました。

3 東日本大震災の教訓を得て

その様な中、2011年に東日本大震災が発生しました。東京駅周辺では建物の損壊などは軽微でしたが、発生後僅か10分あまりで人々が国道などにあふれ出て、道路を埋め尽くす様子が防犯カメラで記録されています。東京駅周辺に滞留し、様々に歩き出し、道路が大渋滞となりました。

私どもは、かねてから取り決めていた



災害対策本部の開設

災害対策本部に集合し、町内のビル一棟ずつ被害状況を聞いて回りました。ところが一棟のビル全体を把握している人が誰か分からず、警備室もないビルの被害調査は思いのほか長時間を要しました。

後日、実は同じことを町内消防団、町内青年部も行ってたのを知りました。もし分担を決め効率よく調査していれば重複を省き早く正確に行えたという反省に至りました。それを契機に災害対応のあり方を考え直すことになりました。

ある時は、東京駅前の超高層ビルにお願いし定点観測カメラを設置し町内を一望する仕組みを構築、又ある時は被害情報を文字記号等で通用口に表示してもらい、それを見て詳細な被災・救援情報を迅速正確な伝達方法の共有化を図りました。さらに、ネットを使って救援と災害状況をマップ上に展開するマップSNSソフトを開発し、テストを繰り返しています。

防災訓練も従来のレサシアン（心肺蘇生訓練用マネキン）とAEDが置いてあり、心肺蘇生と分かっている訓練を行うのではなく、ただうつぶせに倒れている人と同伴者がいるという設定で参加者に体験してもらい、加えて同時に火災が発



はしご車による救出訓練を真剣に見つめる参加者

生するなど同時多発の発災対応型ブラインド訓練で適切に出来るか？ という訓練を重ねて行ってまいりました。

ここでは、参加者の皆様に被災者を救護すると共に同伴者や本人から氏名・年齢・住所・勤務先・連絡先・被災時の状況などを聞きメモをしておくことの重要性を強調してまいりました。これは、集計して行政に伝えるためです。

4 おわりに

私達の街は、まもなく超高層ビル群の街に生まれ変わります。今、これまで蓄積した経験を周辺の町会にも共有し地域間の連携を強化する方向を模索しています。その根幹は他人の悩み苦しみ悲しみを自分のこととして考えられる「思いやり」の心です。落とした財布がご本人に戻ると外国人は驚きます。日本は世界で賞賛される思いやりの国です。「思いやり」の共助・地域間で無駄のない効率的な共助を目指して地域防災に邁進し数々の受賞に恥じない様若い世代にも伝承できたら幸いに存じます。